

4-5

忠海中学校における学力と 教育力向上の取り組み

広島県竹原市立忠海中学校 教務主任 渡部 光昭

1 本校の学校経営ビジョン

1 教育サービスの提供という考え方

現在、広島県では、新たな教育県ひろしまの創造という義務教育改革ビジョンに沿って教育改革が進められている。確かな学力、豊かな心、信頼される学校の3本柱を中心に、県民の期待に応え、信頼される公教育の実現をめざしている。県がすすめる平成16年度の重点施策は、「知・徳・体の基礎・基本の定着」「学校の自主性・自立性の確立」である。

これに、竹原市教育ビジョン「通って良かった学校づくり」をふまえ、忠海中学校の学校経営ビジョンは、校長の方針をもとにつくられている。

本校の学校経営ビジョンは、次の2つの基本的なコンセプトをもとに、考えられている。

- ①生徒と保護者はクライアント（顧客）である。
- ②学校は「教育」というサービスを提供する場である。

「通って良かった」「通わせて良かった」という竹原市教育ビジョンを達成するためには、顧客である生徒・保護者が、我々学校が提供した「教育サービス」に満足する必要がある。そのためには、質の高い教育サービスを提供していくことが求められる。質の高いサービスの条件は、「サービス内容の充実」とそのサービスを提供する人つまり「教職員の質の向上」であると考えている。

本校は、次の3つの教育サービスを提供する必要があると考えている。

- ①あなたの学力を確実に身につけるための**知の教育サービス**。
- ②あなたの心を確実に育てるための**徳の教育サービス**。
- ③あなたの健康と体力を確実に育てるための**体の教育サービス**。

2 知の教育サービス

本校の考える知の教育サービスは、学力の定着に関するサービスである。このサービスは3つの側面で提供される。1つは「教えるサービス」つまり、授業を中心とした基礎・基本の定着をさせるあらゆる取り組みのことである。2つめは「チェックするサービス」で、教育アセスメント全般をさし、特に学習評価がメインになる。3つめは「説明するサービス」で、生徒、保護者に学力の定着状況、学習課題、学習法などの説明を行っていくことが該当する。具体的な知の教育サービスに関する実践例は次のようなものがあげられる。

- 平成13・14年（広島県基礎学力定着研究）、平成15・16年（文部科学省 学力向上フロンティア事業）の研究実績。
- 多様な授業形態（TT、習熟度別学習、少人数学習）を実施。
- 多様なテスト（標準学力検査、定期テスト、到達診断テスト）で、客観的に評価を行い、学力を分析。
- 多様な学習方法の開発（様々な繰り返し学習の5教科実施、思考表現道場の開設、判断基準前提示法、効果的グループ学習を導入）。
- 多様な選択教科の実施（興味・関心別、領域別、習熟度別）。

- 読書タイムの完全実施(毎日朝8:35～8:45)。
- ことばの教育の実施(読み聞かせ、思考表現、小中
共通漢字検定制度導入)。
- 「拓己の時間(総合的な学習の時間)」のリニューア
ルスタート(教科との関連性、自己課題、問題解決
の目標を明確化)。
- 義務教育9年間プランの実施(読み書き計算は、小

中共通検定制度導入)。

- 授業規律の確立で、学習環境づくりを徹底。
- 信頼性と妥当性のある教科の評価をめざし、評価
信頼度数を公表。
- 生徒・保護者へ各教科で責任を持って評価の説明
を実施。

3 徳の教育サービス

本校の考える徳の教育サービスは、中学生が、いわゆる思春期で、心も体も一番ゆれ動き、逆に一番育つときであるという捉えに立ち、3つの柱で支え、育てようとする、いわゆる、心の教育、支援に関するサービスのことある。このサービスは3つの柱(側面)で提供される。1つは「自分づくりのサービス」である。道徳教育や豊かな心を育成する体験などの教育活動のことである。2つめは「トライアングル教育支援サービス」で、子どもを育てるために学校・家庭・地域の三者で教育活動を進めていこうとする教育活動をさす。3つめは「心理教育援助サービス」で、子どもの心の支援、カウンセリング、親への子育て支援などが該当する。具体的な徳の教育サービスに関する実践例は次のようなものがあげられる。

- 発見(1年)ー深化(2年)ー実現(3年)の系統的進路指導(発達段階に応じた指導)を実施。
- 生徒の心をつかむ取り組み(教育相談週間)を実施。

- 教科の学習を自分づくりの心に活かす拓己の時間(総合的な学習の時間)を実施。
- 規範意識を育てるための一貫した生徒指導の実施。
- 地域と共に子どもを育てるために地域の人材活用を推進。
- 家庭と共に子どもを育てていく学校開放と保護者参加型授業の実施。
- 年間を通して、保護者の教育相談窓口を設置し、不登校、社会的不適応など様々な心の問題に対応。内容によって臨床心理士、学校心理士、教師カウンセラーが対応。
- スクールカウンセラー制度の導入(臨床心理士が毎週金曜日に来校)。
- 教師カウンセリング(教師による教育相談、こころのケア)の充実。
- 道徳教育の充実を図り、心を育成。

4 体の教育サービス

体の教育サービスでは、生活の土台は心身の健康であるという捉えのもとで、心と体の健康を目指す教育活動を展開する。特に県のすすめる「食べる!遊ぶ!読む!」キャンペーンの推進を図り、次の3つのアプローチを行う。1つは「体の健康を推進するためのサービス」で、体力づくりに関する教育活動である。もう1つは「心の健康を推進するためのサービス」で、心の支援、カウンセリング、保健室等の心のオアシス、相談体制に関するものである。最後の1つは「健康教育サービス」で保健指導、安全指導、給食指導が該当する。具体的な体の教育サービスに関する実践

例は次のようなものがあげられる。

- 健康3原則(適切な運動、十分な休養・睡眠、調和のとれた食事)の推進。
- 食べる(朝食を食べよう)・遊ぶ(昼休憩などは、外で身体を動かして遊ぶ)・読む(読書タイム、新聞を読むなど、文字を読むことの習慣化)の推進。
- 外遊びに不可欠な三要素(三間:時間・空間・仲間)の確保を奨励。
- 体の健康(バランスの良い食生活の推進)を保健だより等で推進。
- 心の健康のための受け入れ体制(カウンセリング機

能の充実と心の教育)を確立。

■自己管理能力の育成(正しい知識と判断を日常的に指導)。

■社会性の確立(望ましい人間関係の支援)をめざした学習を実施。

2 研究の概要

1 研究テーマ及び研究のねらい

(1) 研究テーマ

教科の「基礎・基本」を豊かに生かす教育実践
ー「思考力」「表現力」を高めるための個に応じた指導方法・指導体制の工夫改善ー

(2) 研究のねらい

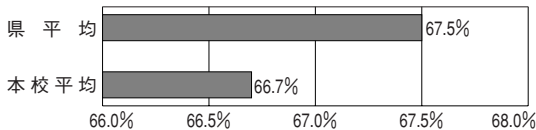
教育課程審議会答申やことばの教育の視点から、知識や技能だけでなく、これからの子どもたちには、論理的な思考や表現力を総合的に伸ばす必要があると捉え、思考力、表現力育成を研究テーマに設定し

た。

次に、本校の生徒の実態を調査したところ、(ア)数学の「数量関係」での表現処理、国語の「内容説明」など、思考し表現する項目について広島県「基礎・基本」定着状況調査の県平均を下回るものがある(図表4-5-1)。(イ)県平均、本校とも表現能力の項目では正答率が60%を切る項目があり、定着率が低い。(ウ)思考力・表現力に関する学習について、苦手意識が強い(図表4-5-2)。

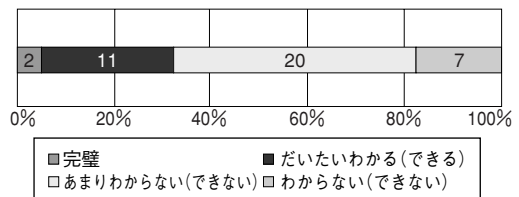
図表4-5-1

「基礎・基本」定着状況調査の結果項目一部抜粋
平成14年度6月実施(2年生43名)広島県



図表4-5-2

「記述する問いに答えることは得意ですか」
平成15年度3月全校生徒実施 意識調査



2 研究組織・体制

(1) 習熟度別指導・少人数指導・TT

一つにこだわらず、各教科で効果的に導入

(2) 全教科を通して取り組むための三原則

○少しの時間で ○繰り返す ○簡単に

(3) 校長のビジョンに則し、研修部を中心に組織

の機能化をはかる

校長：強力なリーダーシップ、確かなビジョン

教頭：実動段階での統括

教務主任・研究主任：企画、立案、運営

3 研究内容

(1) 思考力・表現力についての本校の捉え

思考力

- ことばを論理的に操作し、様々な事象を筋道をたてて考えることができる力。
- 学習場面で習得した知識・技能を様々な場面と相互に結びつけることができる力。

表現力

- 考えた過程や結果を他人に「よくわかる」「納得できる」ように表出することができる力。

思考力を高める、表現力を高めるとは上記の力を培う事である。そのために教科の特質にあわせて、各教科の中で培う思考力・表現力を学習指導要領の

目標に結びつけて次のように整理した。

各教科の学習指導要領の目標との関連づけ

国語	「話す・聞く能力」 「書く能力」 「読む能力」	理科	「科学的な思考」 「観察・実験の技能・表現」	保健体育	「運動や健康・安全についての思考・判断」
社会	「社会的な思考・判断」 「資料活用」の技能・表現	音楽	「表現の能力」	技術家庭	「生活を工夫し創造する能力」 「生活の技能」
数学	「数学的な表現・処理」 「数学的な見方・考え方」	美術	「発想・構想の能力」	英語	「表現の能力」

(2) 研究仮説

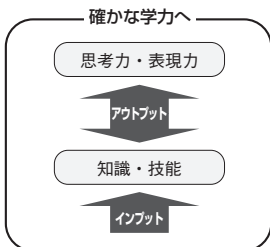
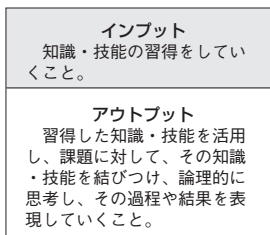
「思考力」「表現力」は、インプットした内容をアウトプットすることにより育成される。

インプットからアウトプットへ

本校では、インプットとアウトプットということばについて、下のように考えている。

思考力・表現力は、インプットした知識・技能を繰り返しアウトプットさせることにより育成されると仮定している。また、この過程を通して知識・技能も深化すると考えている。したがって本研究は、インプットしたことを繰り返しアウトプットさせる教材や指導方法を開発していくものである。

加えて思考力・表現力を学校教育全体で育成していく計画を作成した。本研究では、特に必修教科と選択教科を中心に実践研究を行うこととした。日々の授業を中心とした中で、思考力・表現力の基礎・基本を定着すべきであると考えからである。



(3) 具体的方法

本校では、思考力・表現力を育成するために3つの方法を考えた。

方法1 思考表現道場

- 思考力・表現力の基本的技能を習得する場のこと
- 必修教科で、毎時間、授業の終わりに、短時間で実施

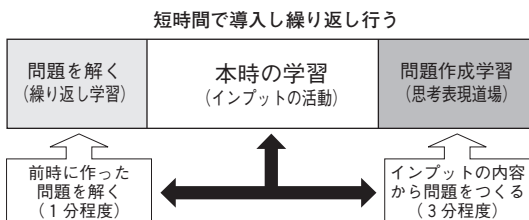
1時間の授業構成

繰り返し学習 (知識・技能の定着) 3～5分	本時の学習	思考表現道場 (アウトプット) 3～5分
------------------------------	-------	----------------------------

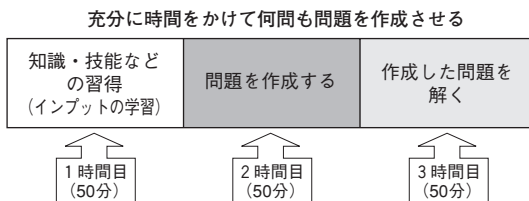
方法2 問題作成学習

- まず、答えを先に決めてから、その答えを導く問題文をつくる学習法
- インプットの活動終了後、インプットの内容を活用し問題を作成する学習。
- 実施方法は下図のような2パターンがある。

問題作成学習の設定パターン1



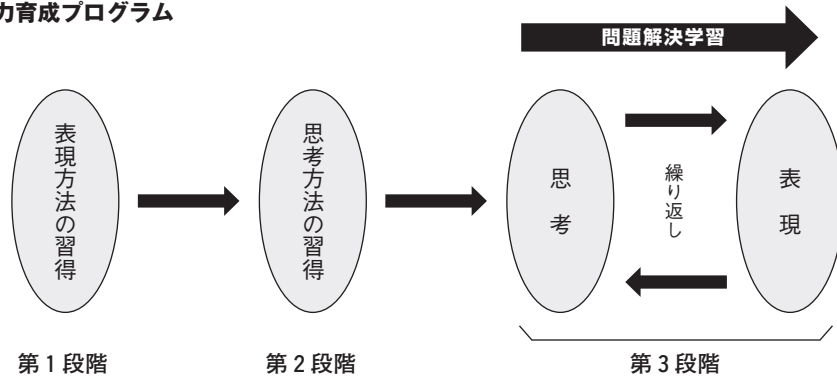
問題作成学習の設定パターン2



方法3 選択教科における思考力・表現力育成プログラム

- 3年の選択教科(国・社・数・理・英)で実施。
- 思考力・表現力の育成を重視した指導計画。
- 思考・表現のためのスキルの習得をした(第1、2段階)後に問題解決学習を繰り返し行う(第3段階)

思考力・表現力育成プログラム



各教科における思考力・表現力及び育成方法
(本校の実践研究に関わる教科のみ)

	思考力	表現力	思考スキル	表現スキル	思考の場	表現の場	思考表現道場
国語	論理的思考力 …目的に応じ読み取ったり聴き取ったりする。	論理的表現力 …相手や目的に応じ、筋道を立てて話したり書く。	要約の仕方。討論の仕方。比較読みの仕方。文章の組み立て方。アンケートの取り方	話し合いの仕方。スピーチの仕方。レポートの書き方。意見文の書き方。主張文の書き方	調べ学習。比べ学習	スピーチ。ポスターセッション。ディベート。パネルディスカッション	①目標と学習内容を振り返って三行書く ②論理的思考力ドリル
社会	社会的な判断力	資料活用技術・表現力	図表の読みとり方。資料の見方や視点のあわせ方	図。表。グラフの書き方。資料の集め方	資料を適切に収集、選択し、多面的多角的に考える。	考えた内容を事実と照らし合わせて正しいかを公正に判断する。判かりやすく表現する	今日の1問
数学	新しいことを見いだす力。共通することから一般的なことを導く力。根拠になることを明らかにしながら筋道を立てて考える力。日常の事象を数理的にとらえる力	数量で表す力。文字や数を使い関係を式で表す力。グラフで表す力。論理的に説明できる力	比較の観点。類似性。傾向性。全体の把握の仕方。根拠をよりどころにしなが、論理を積み重ねていく方法	計算の仕方。文字を使い数量を表現する方法。関係をグラフで表す方法。証明の書き方	図形の性質をいろいろなパターンから見いだす場。証明問題を筋道立てて考えさせていく場	文字式で数量や関係を表現させる場。途中の計算や思考を説明する場。問題を作成させたり解説させたりする場	①問題作成学習 ②学習内容のまとめ。気づきを書かせる
理科	科学的な思考 …問題を解決していく過程ではたらく力(検証性、再現性、客観性)	観察・実験の過程や結果を事実と照して適切にまとめる力(検証性、再現性、客観性)	比較する。関係付ける。条件に着目する。多面的に追求する。類推する。モデル化する。分析する。規則性を見いだす	表・グラフにする技能。モデルをつくる技能。スケッチをする技能。実験レポートが書ける(目的・方法・結果・考察)技能	仮説を立てる場。観察や実験を計画する場。観察や実験の結果から考察する場。既習内容を新たな場面に適用する場。集団思考する場	観察・実験レポートの作成。発表の場。集団討議の場	①問題作成学習 ②思考力育成ドリル
英語	理解の能力 …英語を聞いたたり、読んだりして、相手の意向や具体的な内容をとらえる	書いたり、話したりして、自分の考えを伝える力。言語材料を使いこなす力。目標を達成する力	読むこと聞くことを通して相手の意向や具体的な内容をとらえる。	自分の考えを伝え、説明する力、言語材料を使いこなす力。目標を達成する力	英文の要約(読むこと)説明すること。目的のある聞き取り、問題解決のために聞くこと	スピーチ。日常会話。場面に応じた会話	①本時の学習内容を言語材料を使って表現活動(理解度チェックシート) ②問題作成学習
音楽	一番美しく表現するための工夫の方法を理解し習得する	伝える	工夫のためのいくつかの例を提示する。美しいもののイメージを持たせ、演奏法を習得する	基本的演奏表現方法	お互い聞き合い意見を交換する。意見カードにより自分の弱点を知る。	どのような工夫をしたかを周りに伝える。相手にその表現が伝わるような場をつくる。	①今日の表現活動の工夫
保健体育	自己の能力に応じた課題設定ができる。課題解決に向けた活動内容の工夫ができる。健康・安全についての課題発見ができる。課題解決を意識した生活をおくることができる	身体活動を通して積極的に動く事ができる		技能の習得の仕方(バス、シュート、ドリブル、走、跳、投)	表現の仕方の工夫(自分の能力にあった)。カードへの記入方法	学習カード(自己分析)記入の場。話し合いの場	①学習カード(現状分析と課題設定)

(4) 検証項目

3つの方法で、思考力・表現力を高めることができたか。

思考力の評価の視点

- 結果や事実、図、表、事象などから様々なことを考察し、要点をまとめたり意見や結論を導くことができるようになったか。
- 学習内容(知識・技能)を、様々な場面で活用することができるようになったか。
- 生徒の思考力を中心とした自己評価で、肯定的評価の割合が増加したか。

表現力の評価の視点

- 表現の際に誤字脱字がなく、ことばを適切に使用しているかどうか。
- 具体的に伝えたい内容が分かるような表現(活用する語彙数の増加、内容の具体化、図・グラフ・モデル・数式化など)ができるようになったか。
- 生徒の表現すること(書くこと、話すこと)を中心とした自己評価で、肯定的評価の割合が増加したか。

3 研究の成果と課題等

1 成果

3つの方法により、思考力・表現力を高めることができた。

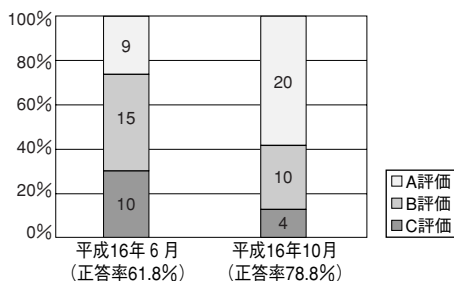
(1) 思考表現道場及び問題作成学習によって、生徒全体の思考力のボトムアップができた。

図表4-5-3は、思考表現道場と問題作成学習を授業で導入する前(平成16年6月)と後(同年10月)の2年生の、定期テストでの正答率及び、ABC評価の人数分布の推移を示している。これによると、正答率が61.8%から、78.8%に上昇している。

また、C層の生徒が10名から4名に減少し、A層が9名から倍増の20名になっている。このことから、思考表現道場と問題作成学習は、生徒全体の思考力のボトムアップを図ることができたと考えられる。同様の傾向は、他教科でもみられている。

図表4-5-3

2年(35名)対象 理科定期テスト
(科学的な思考)のABC評価の人数分布の推移



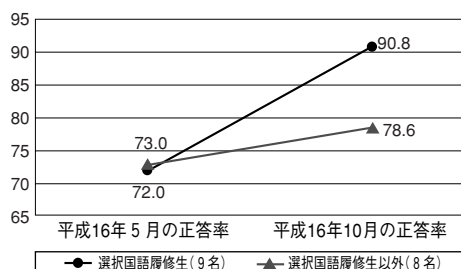
(2) 選択教科で思考力・表現力育成プログラムの学習をした生徒は、それ以外の生徒より、ペーパーテスト(思考の観点)の正答率が高くなった。

図表4-5-4は、国語の読む(思考)の観点の定期テストにおいて、Aの評価を受けた生徒17名を、選択国語履修生と、選択国語を履修していない生徒で分け、正答率を比較したものである。

平成16年5月は、選択教科の学習の初期の段階、10月は選択教科の学習を終了している段階である。この結果から、5月では選択国語履修生も履修生以外も正答率に差がほとんどないが、学習終了後10月では、正答率に差が出ている。このことから、選択教科で行われた思考力・表現力育成プログラムが効果的であると考えられる。同様の傾向は社会、数学、理科、英語でもみることができた。

図表4-5-4

平成16年度前期 国語(読むの観点)でA評価を受けた3年生の生徒(17名)の定期テストでの正答率の推移



2 今後の課題

- 書くことを中心とした表現力の向上は、全教科に渡ってみられたが、話すことを中心とする表現力の向上は、一部の教科に限られたので、この点の育成をすすめていく。
- 思考力・表現力が向上したという生徒の割合は増加したが、依然として記述式の問題について苦手

- 意識を持つ生徒が40%存在するので、苦手意識克服をさらにすすめるために、「できる」という自己効力感を持たせる取り組みをすすめる。
- 思考力・表現力を育むためには、学力だけでなく「豊かな心」を育む取り組みをさらに充実させる必要がある。

4 総合的教育力をどう高めるか

1 本校の実態(「学力向上のための基本調査2004」より)

教師の指導力総合 53.8 (偏差値)

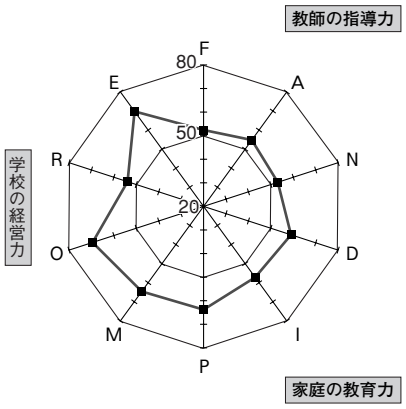
		教師の指導力		
領域		F	A	N
偏差値	授業の土台づくり		学習指導の方法	学習の方向づけ
		52.4	54.8	53.1

家庭の教育力総合 59.7 (偏差値)

		家庭の教育力		
領域		D	I	P
偏差値	規律やしつけ	家庭での交流・支援	学びへの参画	
		59.0	57.2	63.8

学校の経営力総合 68.9 (偏差値)

		学校の経営力			
領域		M	O	R	E
偏差値	校長の経営方針	組織・体制の連携の強化	教育資源の有効活用	教育課程の整備・充実	
		64.6	69.5	53.9	69.8



2 実態調査から明らかになった課題と今後の方向性

(1) 教師の指導力

- ①偏差値は50以上なので、平均以上の教育力があるが、本校の総合的教育力の3要素の中では、一番数値が低いので、重点的に教師の指導力育成が必要である。
- ②授業の土台づくりでは、授業規律や、学習環境づくりを徹底することが方向性としてあげられる。各自で取り組むのではなく学校体制として組織的に構造化する。

- ③学習指導の方法では、研究テーマに沿って授業研究をすすめ、特に本校の研究実績から繰り返し学習を知識技能(スキル)の習得部分と、思考表現力育成の部分に授業システムとして導入する。全教科共通の取り組みとする。
- ④各教師の技量を高め質の高い教師を育成するために人材育成の視点に立った学校経営を校長中心に行う。
- ⑤年間を見通して、計画的な各領域の研修を実施す

る。

(2) 家庭の教育力

- ①家庭の教育力は60近い偏差値でかなり高い。これは、地域・学校・家庭のトライアングル支援サービス(本校の徳のサービスの柱の一つ)が有効に働いているためと考えられるので、今後もこれまでの取り組みを充実発展させていく。
- ②子どもが家庭で交流したり、親からの支援を受けやすくするために、親子がコミュニケーションをとりやすくする場の設定(親子参加型授業、親へのインタビュー、親子で考える話題提供、情報提供など)を積極的に学校が行っていく方向で進める。

(3) 学校の経営力

- ①学校の経営力の偏差値は、3つの教育力の中で一番高く60を超えている。これは、校長に強いリーダー

シップと確かなビジョンがあることに大きな要因があると考えられる。今まで以上に校長を中心とした組織の機能化を進めていき、マネジメントを推進する方向性が重要である。

- ②高い学校経営力の中でも教育資源の活用は目立って低い。これは、IT機器の積極的活用や、視聴覚機器、効果的な機材、空き教室の有効活用、環境整備に課題があると思われる。機材購入の予算、教室整備の予算面で本校単独ではどうにもならない面もあるが、教師のIT機材活用のスキル研修、活用方法の研修をすすめる方向性が重要である。

以上の現状分析と、取り組みの方向性をもとに、具体的な改善プランを次に示す。

3 総合教育力向上のための今後の改善プラン(現在実施中も含めて)

(1) 教師の指導力向上の取り組み

①充実した授業研究実施

- ・非常勤講師を除く本校教師は年間平均3.5回の授業研究を実施
- ・研究テーマ「思考力・表現力育成」を設定し、テーマに沿った授業研究を実施。
- ・授業については必ず良かった点と改善点を明らかにする。(特に、改善点を明確にし、教師同士の甘い形だけの研修から脱却する。質の高い教育力をめざした研修)
- ・各自が全員授業について意見を持つ。
- ・非常勤講師にも授業研究を年間1回実施する。

②自己申告書に基づく個人の指導力育成

- ・全職員が年度初めに自己申告書を提出し、学校経営目標を達成する目的で、研修・分掌・授業等の分野で、年間目標について具体的な数値を明らかにして、管理職の指導のもと人材育成をしていく。
- ・定期的に個人面接、授業観察を管理職が行い、指導助言を行っていく。

③授業規律の徹底

- ・授業規律について、全教師が共通して行う項目を確認し実施する。

④全教科共通の指導方法を確立

- ・基礎基本の繰り返し学習を実施(授業の始め3分程度)。

- ・思考力・表現力の基礎力育成「思考表現道場」を毎時間授業の最後に行う。

- ⑤教科アンケートを実施し、生徒による授業評価を実施。各自の授業改善に反映させる。

(2) 家庭の教育力向上の取り組み

- ①保護者による学校評価を実施し、学校教育に対する家庭の興味・関心を高める。

- ・学校評価表を公開し、必ず評価結果も公開。
- ・保護者アンケートを年間2回実施し、学校評価項目について意識調査を実施し、学校経営に反映させる。

- ②学校教育を公開し、保護者と共に、教育を展開する。

- ・年間カレンダー(前後期2回発行)において学校行事予定を早くから保護者に連絡し、行事に参加しやすい環境づくりを行う。

- ・学校だより、学級だよりを発行し、情報提供を行う。各通信は年間発行目標数を明確化する。

- ・道徳は保護者参加型授業を企画(保護者・生徒・教師が共に劇などを通して教材提供を行い、共に同じテーマについて学習する授業)。

- ・学校の授業、行事公開日を年間15回以上設定する。

③懇談会の充実

- ・学級懇談会を定期的開催し、生徒に関する情報交換、保護者の近況報告、意見交流会を実施し、子どもをめぐる現状、学校の様子等を情報交換し、日々の子どもの関わり方に活用してもらう。
- ・前後期制を導入し、年4回の個人懇談を実施(前期中間懇談会、前期末懇談会、後期中間懇談会、後期末懇談会)し、一人の懇談に十分な時間を設定する(一人25分～30分)。

④スクールカウンセラー、教師カウンセラーの活用

- ・保護者の子育てに関する悩みや、相談を臨床心理士、学校心理士、教師カウンセラーが対応する保護者対象教育相談窓口を設定。

⑤家庭も含めた地域教育力の学校教育への参画

- ・総合的な学習の時間等で、地域の人材を活用していく。
- ・文化祭で、地域で活躍するコーラス、銭太鼓等の文化活動グループが発表していく。

(3) 学校経営力向上の取り組み

①校長を中心とした組織の機能化を徹底する。

- ・主任を中心とした各分掌の運営を行い、企画、立

案と責任を果たすことで、各自の指導力、企画力、創造力を育成する。

- ・各自の責任の所在を明らかにすることで、主体的学校運営を行っていく。
- ・企画委員会(管理職と各部の主任で構成)を毎週定期的に開催し、組織的學校運営を行う。
- ・校長—教頭—教務主任のラインを確立し、報告・相談・連絡を徹底し、校長のビジョンを具体化する組織運営をおこなう。
- ・起案方式を採用し、提案資料、配付資料等は教務主任—教頭—校長の決裁を受けるシステムを導入する。
- ②各部でP D C A (マネジメントサイクル)を逐行する。
- ・学校評価を基にした生徒アンケート、保護者アンケート等を年2回実施し、中間期においては、各部に関連する事項の進捗状況、改善策を立案する。
- ③「例年通り」の廃止。
- ・「例年通り」を廃止し、たえず課題に基づき、新しい改革案を提案していく事を徹底する。